宗教運動の発生に関する一考察

―アメリカ合衆国の'60～'70年代における宗教運動の場合―

白水寛子

目　次

Ⅰ．はじめに ……P．1
Ⅱ．宗教運動の諸相……P．2
　1．宗教運動の三つの潮流……P．2
　2．「カルト」と呼ばれるグループ……P．4
　3．カルトへの入信過程……P．7
Ⅲ．宗教運動への反動……P．8
　1．デプログラミング……P．8
　2．宗教運動の社会的背景……P．10
Ⅳ．おわりに……P．11
註 ……P．11

Ⅰ　はじめに

１９６０年代の後半から７０年代にかけて、アメリカ合衆国（以下アメリカと略す）の宗教の領域に、ひとつの変化がおきた。新しい宗教運動が発生したのである。もちろんアメリカの歴史を通観するならば、宗教運動の発生という現象は今にはじまったわけではない(1)。しかし'６０年代から'７０年代にかけてのそれは、社会学的にみてきわめて異質なものであった。すなわちひとことでいえば、宗教運動が多数の若ものたちによって展開されたのである。その運動のなかで、彼らは直接的な宗教経験（たとえばキリストと直接会話をするなど）を求めてやまなかった(2)。そしてそれを得るためには「異教」が供する

神秘的な儀礼への参加、もしくは麻薬の使用すら彼らは辞さなかったのである。このような若ものの多くは、後に社会からある種の批判をこめて「カルト」(3)と呼ばれるに至る宗教団体にも参加していったのたが、そうしたグループの隆盛もまた今日の宗教運動を著しく特徴づけることとなった。

一方、この宗教運動に対する既成宗教側の対応には立ち遅れが目立った。ただ、ひとたびはこうした若ものたちの動向が、既成宗教の関係者たちにある種の希望をいだかせたこともあった。すなわち、宗教に無縁な若い世代をふたたびそれに引きつけることが可能ではないかという期待が、彼らのうちに生じたのである(4)。しかしながら結局のところ、若ものの既成宗教離れに対し、これといった効果的な対策は打ち出されていなかったようにみえる。

れところで、かの宗教運動が進展するにつれて、新たな問題が生じてきた。それはとくにカルトに参加する若ものと、彼らの家族との間に生じていた確執の激化である。すなわち宗教運動を形成する個々の運動体としてのグループの活動が、おおむねコミューンでの共同生活をベースにしているために、そのメンバーとなった若ものが、家族を離れてゆく現象が生じてきたのであった。そしてそのことが、親たちの側からは我が子を「誘拐」されたと解釈されるに至り、非人道的手段に訴えても子どもを奪還するケースがかなり出てきているのが現状である。

本稿においては、以上のような、アメリカで近年に生じた宗教運動について、とくにカルトを中心に紹介し、あわせてそれに関する若干の分析を行いたい。すなわち、Ⅱでは全体としての宗教運動の主な流れを、そしてⅢではこうした運動に対する反動を扱うことにする。Ⅳではまとめとして、このアメリカの宗教運動が、今後の宗教運動の研究にとって、いかなる示唆を与えるものであるかについて述べておきたい。

Ⅱ　宗教運動の諸相

1.　宗教運動の三つの潮流

ひとくちに'60～'70年代におけるアメリカの宗教運動といっても、それを全体的に把握しようとすることは容易ではない。なぜならそれはきわめて

多様なあらわれ方をしたからである。より具体的にいえばこの宗教運動は実にさまざまなグループによって展開されたということになるであろう。

ただ幸いなことに、この難題を扱ってゆくために示唆的であると思われる調査研究が、ベラー(R.N.Bellah)やグロック(C.Y.Glock)らによってなされている(5)。そこで彼らの分析をもとに、この宗教運動のより具体的なアウト・ラインを描いてみたい。なお彼らが研究対象としたのは、サンフランシスコ近辺で発生、もしくは発展した諸グループであった。そのためこの研究をもってただちにアメリカの新しい宗教運動を説明することは妥当ではないかもしれない。しかしその地域において、この宗教運動が最も活発に展開された事実があるので、そこでの報告をいわば全体の縮図として取り上げることは許されよう。

さて、彼らは様々なグループを調査研究したのち、それらを①アジアの伝統的宗教に根ざしたもの、②新しい凝似宗教的なもの、③西欧の伝統的宗教に根ざしたものと分類している。本稿ではそこに分類された各グループについて個別に述べる余裕がないので、この三つのタイプにもとづいて、この宗教運動を概観するにとどめたい。

まずアジアの伝統的宗教に根ざしたものとしては、インドのヒンドゥー教をベースとしたグループが優勢のようである。ただ注目すべきことは、それら自体が、いわば「新宗教的」な存在であるという点であろう(6)。すなわちインドの既成宗教としてのヒンドゥー教ではなく、それをベースとしながら指導者が再構成した教えが、アメリカに渡来して信者を護得しているのである。

次に新しい凝似宗教運動として彼らがとりあげているのは、政治運動と、人間の持つ可能性をひき出すヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメント(Human Potential Movement)である。この運動は、アジアもしくは西欧のいずれの宗教的伝統にも属さず、その信奉者をして究極的な意味との接触をもたらしめ、かつ人間の存在にとって最も中心的で重要な聖なるものと、彼ら人間とを関係させるものと定義される(7)。そしてここに分類されるグループのうちのいくつかは、自らを宗教的なものとしてひとからげにされることを拒みさえしているのである。というのはそれらにとっては、科学的という言葉が重要なシンボルとなっているからである。たとえばT・M・(Transcenden-

tal Meditation)というグループの場合、それはヒンドゥーの系統につながるにもかかわらず、自らを宗教でないと主張する。なぜなら彼らの目標が、如何にすれば最も効果的に、すなわち「科学的」に瞑想状態に入ることができるかを追求するところに置かれているからだという[8]。

第三にあげられているのが、西欧の伝統的宗教に根ざした宗教運動である。'60年代後半に至り、サンフランシスコのハイト・アシュベリー(Haight-Ashbury)地区[9]から、ムーヴメント・オブ・スピリッツ(Movement of Spirits)と呼ばれる新しい運動が、ヒッピーからクリスチャンに転向した人々によって展開された。一方、アメリカ国内の各地においても'67～'68年にかけて、何人かの伝導師たちが活発な活動を開始する[10]。これが、全国的に多くの若ものを巻き込んでいった、ジーザス・ムーヴメント(Jesus Movement)と呼ばれる宗教運動の幕あけである。先にあげたサンフランシスコにおける運動と、他の地域で生じたものとの間に直接のコネクションは認められないものの、これらの運動に参加した若ものたちが各地に散らばり、全体としてのジーザス・ムーヴメントの形成に広汎な刺激を与えたといわれる[11]。

この宗教運動の一般的特徴としては、聖書への根本的な回帰を主張し、終末的な世界観を信じること、そしてカリスマ的な恩寵(異言・信仰治療など)を求めたり、コミュニテイ感覚を得るためのコミューンの設立をはかることなどがあげられる[12]。

2. 「カルト」と呼ばれるグループ

ところで'70年代に入ると、この宗教運動を形成してきたグループのなかのいくつかと、'70年代以降に新しく結成されたもののうち、あるグループが、社会的に、それも批判的な意味においていきおい注目を集めるところとなった。なぜならばこれらのグループの内部において、宗教活動というにはあまりにも個人の尊厳を無視するようなものが行われていたり、あるいは資金集めの方法にも問題があることが、指摘されはじめたからである。そして一般に「カルト」と呼ばれるこうしたグループの運動に対抗して、反カルト運動も盛んになっていった。それを主導したのは我が子をカルトに引き入れられたと考

える親たちであったが、この問題については後に述べることとしたい。なお'74～'76年にかけて、タイム誌、ニューズウィーク誌をはじめ多くの報動雑誌などが、カルトに関して批判的な論述を展開しているのが注目される。ところで次にあげる六つのグループは、しばしばそうした批判の矢面に立っている主なものである。

① The Unification Church. 日本では原理運動の名で知られている。この団体は1972年に、文鮮明により韓国からアメリカにもたらされた。そして現在アメリカ国内に30,000人のメンバーを擁し、彼らの平均年令は24才である。それらのうち7,000人が常時、グループの活動に従事しているという。彼らは数人で隊を組み、国内を巡回して寄附集めをしている。このグループの関係者によれば、本部の収入は1975年には総額1,200万ドルであったという。しかしこの団体に対立する、メンバーの親たちで構成している組織の算定によれば、教会の収益は年間1億ドル以上はあるといわれる。加えて教会は買いとったホテルなども含めて、かなりの不動産をアメリカ国内に所有しているとみられる。なお、グループは文鮮明こそ、この世界をひとつのキリスト教的「家族」へと統合することのできる人物であると教えるとともに、反共と韓国政府への支持を旗頭としている(13)。

② The Divine Light Mission. このグループは1971年頃、当時18才でGuru Maharaj Ji の尊称を持つインド人 Prem Pal Singh Rawat によって組織された。アメリカ国内での信者数は50,000人で、そのうち3,000人が自分の所得の一割を会へ献納している。また600人ほどは年毎に貧・純潔・服従を誓約して禁欲的生活を営み、彼らは自分の持ち物一切をグループに捧げるという。デンバーにある本部に集められる献金の額は1975年の場合で300万ドルといわれる。主な活動としては、現代風に解釈したヒンドゥー教の瞑想を行うこと、病院や刑務所での奉仕や改宗の推進などが行われている(14)。

③ The International Society for Krishna Consc-

iousness. このグループは3,000人のメンバーを擁しているが、彼らが衣をまとい口々に「ハレ・クリシュナ」を唱えて街頭で布教することで有名である。アメリカ国内27ケ所にコミューンを持ち、毎週日曜日には、およそ6,000人といわれる支持者がそこを訪れるといわれる。1965年ニューヨークでグループを創始したのは、当時70才のインド人 Bahktivedanta Swami Prabhupadaなる人物で、彼はもとビジネス・マンであった。この教えはヒンドゥー教の教典ヴェーダにもとづくものといわれ、信者は肉食・飲酒・性的関係を結ぶことなどを禁止される。コミューンでの生活は午前四時の起床に始まり、長時間にわたる教典朗読、資金調達のための線香や出版物の販売などが日課とされている(15)。

④ The Church of Scientology. ロスアンゼルスに本部を置くこのグループの歴史は比較的古く、1954年に創立された。リーダーのL・R・Hubbardは、科学小説の作家、エンジニア、アメリカ海軍の将校と転職を重ねた人物である。現在の会員数は600,000人を公称しているが、外部からの算定では中核となるべきメンバーは、5,000～10,000人といわれる。グループ内では禁欲的な規律の遵守などは要求されておらず、電気装置を用いた心理療法に重点が置かれている(16)。

⑤ The Children of God. グループの創始者はDavid Berg（現在60才に近い）というもとバプティスト教会の伝導師である。彼は不穏当な行為をなしたとして教会を追放されたのち、カリフォルニアでこのグループを組織した。'60年代も終りのころのことである。そしてジーザス・ムーヴメントを形成した様々な団体のひとつとして、Children of God はこの世界が破滅に近づいていると主張し、バーグは自らをモーゼと称したのであった。

今から数年前にバーグとその配下の有力なリーダーたちがヨーロッパに渡ってしまい、以来組織は拡散している。しかし「モーゼの書簡」と呼ばれる小冊子を通じ、リーダーの予言や命令がアメリカ国内のメンバー（5,000人といわれる）に伝えられている(17)。

⑥ T.M. (Transcendental Meditation). 最近日本にも支部が設立されたグループである。超越瞑想、すなわち思考の状態を越えて悟りに達する瞑想を得ようとする、ヒンドゥー教系の教えである。創始者はMaharishi Mahesh Yogiというインドの宗教家で、'67年の後半から翌年にかけてアメリカ国内で大きな反響を呼んだ。このグループの特色は、瞑想のテクニックを何にもまして重視するがゆえに、自らを宗教とは認めないところにある(18)。

以上のグループが、'60～'70年代のアメリカにおける宗教運動をになった団体のうちでも社会から批難をあびているものである。そうした批判を鵜呑みにすることは避けるべきではあるが、今まで列挙した中にはUnification Churchのように、その背後に強力な政治的意図が働いているもの、あるいはChildren of Godのように、コミューン内部で強姦が行われていた例(19)があるなど、実際に社会的批難をあびるだけの理由を持つグループも存在する。なお、とりわけ批判の対象とされるのが、カルトが若ものを勧誘する方法である。それゆえこの点についてもう少しふれておくことにしたい。

3. カルトへの入信過程

ある精神分析学者によれば、カルトに入信する人間は大きく二つのタイプに分類できるという。そのひとつは慢性の精神分裂もしくはそれに近い症状を呈する人たちであり、もう一方はごく普通の若ものである。そして後者の場合に関しては、「若ものがおとなになるために必ず通過する危機的段階にさしかかったとき、カルトのしかけたワナに落ち、そこからぬけ出せなくなった」という見解がある(20)。ところがカルトのメンバーとなった人びとの多くは、そこに入信する以前の自分の精神状態が不安定であったことを認め、さらに、もしそのグループの勧誘者に「救けて」もらうことがなければ今頃は自殺をはかっていたであろうとも告白するのである(21)。

それではこれらの若ものは、どのようにカルトのメンバーとなったのであろうか。次にあげるのはUnification Churchへの入信過程の一般的なタイプである。

ある学生が、大学のキャンパス内で異性に声をかけられる。相手は自分に興味を持っているような態度を示し、喜びにあふれた生活を共にしている家族と食事をしようと誘ってくる。これがいわゆるmoonie と呼ばれるUnification Churchのメンバーとなる最初のステップである。多少のヴァリエーションこそあれ、この話のパターンは共通する。ともかくこうした誘いに応じて集会に出席した人びとは、グループの「兄弟姉妹」から、かって体験したことのないような観迎を受けるのである。そしてその場においては、この世をより良くするために、というような講話もおこなわれる。やがて集会が終るころ、再びかれらは週末の合宿に参加するよう要請される。

この合宿に参加している間は、自分が今、何を体験しているかについてゆっくり考える暇も与えられない。夜明けから一日中、講話、体操、体験告白、歌などが続く。そしてこの合宿の終りには、さらに一週間ほどおこなわれる次の合宿への参加が求められてくるのである。このあたりで参加者たちは、今自分がかかわっているグループが何であるかを、ぼんやりと把握するようになる。しかし同じようにしてつれてこられた他の人々と話すことは、ほとんど禁じられているので、自分の疑問を明らかにするすべもない。結局のところ参加者の半数以上は次の合宿には出席せず、その残りがメンバーとなってゆくといわれる(22)。

Ⅲ　宗教運動への反動

1.　デプログラミング

この宗教運動に対する反動とは、いいかえればカルトに対する反発に他ならない。なぜならばジーザス・ムーヴメントの全てが批難の対象にされたわけではなく、また'60～'70年代においてより広範に受容された東洋のZenなどもその対象ではないからである。宗教運動の中でカルトとそうでないものを人々が区別した点は、おそらくそのメンバーたちに、家族から離れ、閉鎖的なコミューンでの生活をすることを義務づけるグループであるか否かにかかっているようにみえる。そしてこの反動の主体をなすのが、我が子をカルトに

「誘拐された」とみなすメンバーの親たちであるのはいうまでもない。ごく一部をのぞけば、彼らはほとんどがグループに対して敵意をいだいており、互いに連帯して協会を設立し、関係文献の収集や警告のパンフレットを発行するなど活発な活動をおこなっている。

ところでこうした親たちの中には、何とか子どもを取りもどそうとして、強制的手段をとる人々が少なくない。その場合まず我が子の生活しているコミューンを訪問し、車で誘い出す。そしてあらかじめ予約しておいた宿舎に若ものを監禁し、前もって依頼したデプログラマーと呼ばれる役割を果たす人に彼らを「逆洗脳」させるのである。このデプログラミングは「ある人物が、彼に反対の立場をとる人物によって、自分の信念に疑問を持つよう強制され、かつ自らの宗教やその実践を受け入れた契機となった回心についての内省をせまられる過程」である(23)。そしてデプログラミングのテクニックとしては次のようなことがいわれる。

まず若ものにカルトの指導者への信用を失わせ、理想と現実のくい違いを提示する（たとえば、「リーダーは自分がメンバーたちから搾取していながら、なぜ愛の教えが説けるのか？」などと質問する）。やがて若ものがデプログラマーの話に耳を傾けるようになれば、それはその人物の内部で、現実が理想にとってかわりつつある状態を示すものと考えてよい。そのうちに自分の方から心を開いてカルトに対する不平をもらし始め、さらにデプログラマーに同調するようになったときに、自らをカルトのメンバーであるというよりも、敵対者として考えさせるようにするのである。こうしたデプログラミングを受けてグループを離れる者は多いが、その後の社会への再適応がかなり困難を伴うケースも出てくる。そこでいくつかのコミュニティではＹＭＣＡやＹＷＣＡなどが、そうした若ものたちのために特別な活動の場を設けている(24)。

ところで反カルトの活動家の間には「正式にデプログラミングを受けた人の方が、自分から進んでグループを離れたものよりも、社会的に再適応するのが早い」という一致した見解がある(25)。しかし一方では、デプログラミングが失敗するケースは全体の1/4にのぼるともいわれている(26)。その原因は他ならぬデプログラマー自身の資質にあるとみられているが、彼らの能力について判定基準がまだ設けられていないのが現状である。デプログラマーになるのは聖職

者や、その若ものの親類、あるいはこれを専門の職業にしている人など様々であるが、なかにはかつてカルトのメンバーであった若ものたちもいる。そして特に後者の人物に、カウンセラーとしての技量に欠けるものが多いことが認められている[27]。

もとより強制的にデプログラミングを受けさせられた若ものは、親への信頼を全く失った状態にある。その上さらにデプログラミングにまで失敗したとなれば、親子関係の悪化を見るのは当然であろう。かれらはコミューンにもどると、再び親と交渉を持つことがなくなるという。

以上のようなデプログラミングに関する問題は、これからも様々な論義を呼ぶに違いない。特に自分の子どもとはいえ、彼らが自ら選びとった宗教を、親が勝手に排除しようとすることが許されるかどうかは今後に残されたきわめて重大な問題であろう。

2. 宗教運動の社会的背景

今述べてきたようなカルトに、若ものたちが魅入られた理由は何であろうか。これについて考えるためには、この宗教運動のにない手であった彼ら自身の動向についてふれる必要があろう。多くの研究者がすでに指摘しているように、[28]若ものが中心的役割を果たした今回の宗教運動には、いわゆる対抗文化（カウンター・カルチャー）の隆盛という背景があったのである。[29]

この対抗文化は、アメリカの文化の広範な分野にあらわれた。すなわちスチューデント・パワーに代表される政治運動（ベトナム反戦運動を含む）はむろんのこと、絵画、演劇、音楽などの芸術の分野から、Jeaning、自然食の愛用といった生活様式（ライフ・スタイル）そのものにまで幅広く展開されてきたのである。そうした様々な現象に共通するのは、「愛」や「平和」あるいは「連帯」といったきわめて精神的なオリエンテーションがその中に見られることである。さらにそれはカウンター・カルチャーと呼ばれるように、政治、芸術、生活様式といった各々の分野で、既成の、もしくはメイジャーの価値と鋭く対立するものであった[30]。

このような対抗文化の隆盛とあいまって展開されてきた宗教運動であったが

ゆえに、それは多分に既成の宗教とは異なった宗教実践や信念を提示したのである。そして若ものたちの側についていえば、彼らはそうした宗教運動に身を投じるという行動を通して、社会への反抗の姿勢を表現したといえる。わけてもカルトというレッテルを人々にはられたグループの、その性格が反社会的であればあるほど、それに引きつけられていった若ものが多く存在したことは不思議ではなかったのである。

Ⅳ　おわりに

本稿では '60～ '70年代におけるアメリカの宗教運動について概観してきた。そこで明らかにしたように、この宗教運動の特徴を手短かに述べれば、それは若年層によって展開されたということであろう。この点は、たとえば日本の新宗教運動が、おもに中年層を主なにない手として展開されてきたことと、みごとな対照をなしている。したがってこのアメリカの宗教運動がわれわれの今後の研究に示唆を与えるところがあるとすれば、それは宗教運動というものが、若年層によってもになわれる可能性をもつという点を認識させてくれたことであろう。すなわち「日本の新宗教運動のにない手イコール中年層」というわれわれが慣れ親しんだ図式も、そうした認識の上にたって見なおすとき、必ずしもアプリオリに断じてしまってよいかどうかは疑問であるということを、それは示唆している。

註

(1)　アメリカでは建国以来、様々な宗教運動が展開され、なかにはモルモンのように今日なお勢力を持つものも多い。また白人社会においてばかりではなく、被征服者であるアメリカ・インディアンたちの社会においても、ゴースト・ダンスやペヨーテ・カルトなどの運動が展開されたのであった。

なおひとつの宗教運動とは「新しい宗教、もしくは既存の宗教の新しい解釈を流布しようとする組織的な試み」と定義される。(Nottingham,

Elizabeth K. Religion : A Sociological View. New York, N.Y. : Random House, Inc., 1971, P. 224.) 本稿では宗教運動の用語を、こうした個別的な「試み」の集合体としての意味で用いている。

(2) Enroth, Ronald M., et al., The Jesus People: Old Time Religion in the Age of Aquarius. Grand Rapid, Michigan : W.B. Eerdmans Publishing Co., 1972, P. 227.

(3) カルトに関しては様々な見解があるがこの宗教運動に関連して用いられる際にはかなり批判的なニュアンスがそこに付加されているように思われる。たとえばストナーとパーク(Stoner, Carroll & Parke, Jo A.)はカルトを次のように把握している。「①カルトは現在生存しているリーダーを持ち、その教義は彼らの得る啓示にもとづいている。しかしそれは伝統的な教義や教典に依存したものである。②リーダーは各メンバーの信仰の度合をはかりうるただひとりの人物として、自分の絶対的権力をほしいままにする。その上、メンバーたちが耐乏生活をしている一方で、リーダーは豪華な生活を送る。③そのカルトへの改宗が、世界や人類の救済をもたらすと説かれるが、実際にはコミュニティ改善などの社会的なプログラムを後援するようなことはない。④カルトがメンバーたちに課す活動は、彼らの能力、たとえば知識や、それまでに受けてきた教育などを必要としないようなものである。⑤カルトは排他的で、そのグループのメンバーだけが救済や幸福に到達すると信じている。そして彼らはまた、自分たちがグループ外の人間よりも「優れた者」だと確信するよう教えられる。⑥カルトのメンバーとなるためには、自分の仕事、勉強、友人そして家庭から離れなければならない。⑦メンバー確保や教義を教えこむ訓練の一部として、カルト内部では自己破壊や思考のコントロールがおこなわれる。⑧メンバーの、カルトへの反対意見などを抑制することにより、彼らに批判的分析をさせない。それによってカルトの権威に対するメンバーの依存性を培い、彼らのおとなとしての成熟をさまたげる。⑨カルト内での儀礼は精神的に不健全であり、いくつかのグループでは麻薬の使用、もしくは性的儀式などもおこなうために、肉体

的にもメンバーを危険にさらす場合がある」。

(Stoner and Parke, All Gods Children : The Cult Experience—Salvation or Slavery ? Radnor, Pa. : Chilton Book Co., 1977, PP. 3－4.)

(4) Hargrove, Barbara. "Church Student Ministries and The New Consciousness," in Glock, C.Y., and Bellah, R.N., (eds.), The New Religious Consciousness. Berkeley and Los Angels, Ca.: University of California Press, 1976, P. 205.

(5) Glock, and Bellah, ibid.

(6) ibid., P.2.

(7) ibid., P.73.

(8) ibid., P.2.

(9) 麻薬を使用し反体制的な人間(すなわちヒッピー)のいることで有名なサンフランシスコの地域。(Eugine E. Landy The Underground Dictionary, 1971. 堀内克明訳編『アメリカ俗語辞典』研究社 1975 P.184)。

(10) これらの伝導師たちが説いたことは、1967年の第三次中東戦争でイスラエルが勝利をおさめるならば、その時こそ予言が成就し、終末の時代が到来するというものであった。(Enroth, et al., 1972, PP.12—13.)

(11) Enroth, et al., op.cit., P.13.

(12) ibid., P.16. ジーザス・ムーヴメントを支持した若ものは、あらゆる経済的、社会的な層から出てきたが、彼らのなかには黒人をはじめその他の小数民族はほとんど含まれていなかったという。(Enroth, et al, 1972, P.238.)

(13) U.S. News and World Report, June 14, '76, P. 53.

(14) ibid., P.53.

(15) ibid., P.53.

(16) ibid., P.53.

(17) ibid., P.53.

(18) Glock, and Bellah,(eds.), 1976,P.2 及びNeedleman, Jacob. The New Rebgions, Garden City, N.Y. : Doubleday Company, Inc., 1970, P.132.

(19) メンバーはこの事件のあったことを否定している。

(20) Stoner and Parke, op.cit., P.218.

(21) ibid., P.283

(22) ibid., PP.16—18.

(23) ibid., P.230.

(24) ibid., P.285.

(25) ibid., P.282.

(26) ibid., P.287.

(27) ibid., P.240.

(28) 例えばGlock & Bellah, (eds.), 1976. (前掲書)に詳しい。

(29) カウンター・カルチャーという言葉は、１９６０年代の中頃から、若もの文化の特殊形態をあらわすものとして用いられてきた。その文化のメンバーたちは、より享楽主義的な生活様式に共感し、それまで広く社会にゆきわたっていた文化の主要な規範の受け入れを拒否したのである。対抗文化そのものは工業化の進んだいずれの西欧の社会にも見ることができるが、特にアメリカにおいて顕著であった。むろんこのような文化が突如として出現したわけではない。かなり以前から、その先駆者ともいうべき '５０年代のビート族がおり、また '６０年代にはヒッピーたちが世界的な注目を集めていたのである。そしてこのヒッピーの持っていた価値観(愛、平和、自由の尊重など)に影響をうけた多くの若ものたち(１０代の中盤以降から２０代の後半の人々)のあいだに、対抗文化はおこったのである。(Encyclopedia of Sociology. Guilford, Conn.: The Duskin Publishiug Group, Inc., 1974, P.60.)

(30) '６０年代から '７０年代に至る間の、アメリカの若ものたちの動向に関

しては、角間隆『燃えるアメリカ―「神話」に挑戦する若者たち』（中央公論社、１９７１）が参考になる。